THE BOOK REVIEW PRESS
図書新聞
3477号
2021-1-1 金
〒169-0051（専門オフィス）東京都新宿区高田馬場3-13-11 ノーブル3F
電話03(5937)3918 FAX03(5937)3919
〒136-0071 東京都江東区亀戸8-25-12
購読料（送料共）1年45,000円（2部）
半年25,000円（2部）
特別定価330円（本体300円）
発行　武久出版㈱©

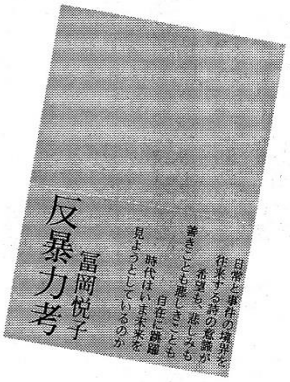
BAR
山﨑文庫
絶望は無料です。
〒107-0052
東京都港区赤坂6-13-6
赤坂キャステール102
赤坂駅6番出口から徒歩5分
03-6804-5800
営業時間 17:00～翌3:00
日曜定休

暴力と祈りのあいだで

生き延びようとする私たちは、常に人間性を問われることになる

佐藤 恵

冨岡悦子 詩集
▶反暴力考
7・25刊 四六判80頁 本体2000円
書文社



著者がこの詩集の「覚書」で触れる石原吉郎は、自らのシベリア抑留体験に基づくエッセイ「ペシミストの勇気について」で、行進中によろめいた囚人が、逃亡とみなされ射殺される状況を書いている。五列に整列したうちの外側が、最も犠牲となりやすい。「したがって整列のさい、囚人は争って中間の三列へ割りこみ」、「すこしでも弱い者を死に近い位置へ押しやる」。この「加害と被害の同在という現実」は、現代社会においても発生する。生き延びようとする私たちは、常に人間性を問われることになる。

この詩集の中の一人称で語る者たちは、皆ぎりぎりの位置にいる。

学校という集団の中で孤立した「私」は追い詰められ、「私は危ういです　先生　逃げまわったあげく　絶壁に両手でしがみついています」「やられたら　やりかえせ　なんて　なんで　私に　教えたんですか」と訴える。

「戦争でいちばん酷い目にあうのは　女こどもだって言う人がいるけど　それは嘘だ　戦争でいちばん先に　酷い目にあうのは　若い戦士だ」とも言う。すでに多数という安全な場から追いやられている彼女たちは、検証を怠りがちなステレオタイプの意見に対しても、安易に同調しない。

荒んだ言葉の中に、南方熊楠が研究していた粘菌を悪用し、「弱する折には　突如ゲロを吐いて　撃退していました」など、機知に富んだ呟きが要所に混じり、逃げ道を失った「私」と読み手の救いとなっている。

伊東静雄の「堪えがたければ　われ　空に投げうつ　水中花」という悲痛な詩を胸に、プラットホームを歩いた「私」は、「花屋の前に立つ」。そして「断たれた茎を　水に浸して」いる花々の中から、剣の葉と〈勝利〉そして〈人格的強さ〉という花言葉を持つ「グラジオラス」を指さす。

「投げうたなかった　水中花のために」。瑞々しく鮮やかに世界は蘇り、彼女はこの世界に留まる。

「褐色の肌の少女」が埠頭で、隣の少年に話しかけながら「ふいに悲しげに　歌をうたう」場面は、美しい映像を思わせ印象的だ。見つめる「私」は、他者に悲しみや苦悩を寄せながら、束の間心をゆるめる。同じ場所に流れ着いた「小舟」のように、寄り添い揺れる共苦によってしか、辛苦は和らぐことがないのかもしれない。詩とは、行き場のない悲しみを託す「小舟」でもあるのだろう。

個々の思いは、ときに幼く、真に迫った言葉で再現されている。声にならず胸中に放たれた独白にどう向き合うかは、一人の人間である読み手に委ねられている。

一人一人の痛みや悲しみについて考えた後で、再び石原吉郎の「もし私が何ごとかに賭けなければならないのであれば、私は人間の〈やさしさ〉にこそ賭ける」（一九六三年以降のノートから）という言葉を反芻している。

「モスが去ったあと　その重量だけが　枝に残っていた」「なかったことにできない出来事を　天秤の一方の皿に　乗せるように」「力の応酬は　すでに　モスと枝のあいだにもある」と「私」は言う。「やられたら　やりかえせ　なんて　なんで　私に　教えたんですか」という言葉がよぎる。暴力を「なかったことに」できる錘はあるのだろうか。その錘を置こうとすること自体が、罪であり暴力なのだろう。「そこに　枝があるから　鳥は乗り　枝は受けとめる　その応酬を　加えるものと受けとめるものに分けたがるのは　私の　さみしい　こころの　ゆえだ」と、免れようのなかった「出来事」の重さを量りながら、それを裁こうとしてしまうことにまた揺れている。

苛酷な状況を耐えた後で訪れた静かな境地に、彼方からの眼差しが交差している。と同時に、生き延びようとする健気さと不条理な現実との矛盾を思う。その狭間で、自己の存在理由は問われ続ける。一人でよろめかずに立つ強さとは、その矛盾に耐え続けることなのかもしれない。

暴力が止まないこの地上に視線を巡らしたのち、「姉」と交わす穏やかな会話に心が和む。

「となりを歩く姉が　薔薇ってソウビともいうのね　と不意に言った　フユソウビ　マンシンに光　受けにけり　満身創痍の　満身ね」

この詩集と根底を共にすると思われる著者の評論『パウル・ツェランと石原吉郎』（みすず書房／二〇一四年刊）では、パウル・ツェランの詩に触れながら、「薔薇」が「救済を祈る人間存在のメタファーとして描かれている」と解説している。「ソウビ」は薔薇のイメージからは遠い「装備」を連想させたのだろうか。

装備を外すように詩集の帯を取ると、薔薇色の文字が現れる装幀にも思いが深まる。

無防備になった瞬間、本来の柔らかな人間の姿が現れるのに立ち合う思いがする。この詩集の最後に満ちた光に未来を委ねながらも、詩人は、人間への信頼を手放さなかったのだと考えている。

読後も、彼方からの応答に耳を澄ましている、この言葉を最後に置きたい。

暴力とは　私が　私であることに　由来する　私という個が　なく
なれば　私は　ようやく
暴力から　罷免される　声をうしない
重さをなくす　けれど　そのの
ちになお　揺れるさみしさを　冬の
乾いた空は　いつか　受けとめるだろうか

（詩人）